



Title	令和五年初春文楽公演『傾城恋飛脚』（令和5年1月14日・国立文楽劇場）
Author(s)	高木, 帆乃花
Citation	演劇学論叢. 2024, 23, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

が等号関係を結ぶことを知るよしもなく作品に接することとなる。

次に省略されたのは、シテツレの掛け合いの後のシテと地謡の文言であり、ここでは清経が妻に対して、死を決意した所以である長門国に源氏が押し寄せた話など、筑紫の戦いの描写を展開する。この箇所が消去された結果、宇佐八幡への神託に武運を祈って願掛けをしたものの結果はつれないものであった、と清経が妻に報告をするに留まっている。この省略は、長かった死への経緯を時間的制約ゆえに単純化しただけではなく、話の時間を短くし、内容の質を弱くすることによって、戦争の残酷さを少しでも観客に感じさせない上演をなすことが狙いの一つにあったのではないかと私は考える。世阿弥の厭戦的思想は、『清経』においては中将でありながら戦い抜くことなく、敵に殺されるのを避けて自死を選んだ、ある意味で弱虫な清経が成仏を迎え幸福になるという姿から見出すことが出来る。戦乱の終わりによって幸福が生まれるというこの厭戦の主張は、戦争の描写がより多く悲惨で強い情念を観客に抱かせれば抱かせるほど、成仏による、太平との差が生じ、観客の中に重く押し掛かってくるであろう。今上演では、戦争の描写がかえって抑えられたことにより、先の主張を裏返せば、世阿弥の厭戦的思想もまた同時に抑えられるに至ったと言えるであろう。

最後の省略は清経が身投げの始終を語った後の場面である。具体的には、ツレの「聞くに心もくれはとり。憂き音に沈む涙の雨の。怨めしかりける契りかな」とシテの「言ふならく。奈落も同じ。泡沫の。あはれは誰も。変らざりけり」が消去されている。観劇前の発表ではシテの「言ふならく」の歌により、勝つあてもない戦の中でどうしようもない清経の心情が語られ「恋之音取」の思想は完成

を迎える、という意見があった。実際、ツレの省略部分から見ても、聞くに心も「くれ（真つ暗になり）」そんな清経の状況をうかがうことが出来、続く清経の「言ふならく」ではツレの発言に対して「言うな」としたためつつ地獄を意味する「ならく」と続いていることが読み取れ、清経が追い込まれている姿を見出すことが出来る。この部分が消去されることで、本来消去されなければ観客が清経に対して強く思い描く「戦に明け暮れる生活から次第に追い込まれていき、逃れ死んでいく」ような人物像は、一点目の消去箇所に見られる清経のイメージ同様に観客の注意の外へと追いやられる。

以上、三点の省略箇所によって「聖人としての清経像」や「長い戦の中でどうにもならなくなり自死を選ぶ清経像」、そして「そうした清経を描くことで生まれる世阿弥の戦争への観念」といった大きな要素は、主題としての力を失うに至った。代わって相対的に、小書として今回用いられた「恋之音取」は、作品全体の副題として挙げられている点からも分かるように作品全体の中で強い主張を見せることとなった。その結果、今上演は、恋愛という能に馴染みのない観客でも理解しやすい、明白なる主題を前面的に押し出すことに成功したのである。

令和五年初春文楽公演 『傾城恋飛脚』 (令和5年1月14日・国立文楽劇場)

高木 帆乃花

令和五年の初春文楽公演の第三部の演目は、『傾城恋飛脚』『新口村の段』と『壇之浦兜軍記』『阿古屋琴責の段』の二作品であった。

一作品目の『傾城恋飛脚』のうち、「新口村の段」は、公金の横領のため逃避行を続ける忠兵衛・梅川と、彼の実父孫右衛門の別れを描いた場面である。参考として、以下に、『国立文楽劇場 令和五年初春文楽公演』フライヤーから「新口村の段」のあらすじを抜粋している。

飛脚屋の養子亀屋忠兵衛は遊女梅川を身請けするために公金を横領しました。追われる身となった忠兵衛は梅川を連れて故郷新口村に向かい、実父孫右衛門の姿を陰ながら拝みます。突然現れた親切な梅川を嫁と悟り、孫右衛門は世間に対する義理と、子への情に苦しむ胸の内を語ります。

「新口村の段」で描かれる親子の対面は短い。父の孫右衛門を残し、忠兵衛は再び梅川と共に雪の中を逃げていく。さらに続く場面では、忠兵衛と梅川は追手に捕らえられるそうだ。したがって、この『傾城恋飛脚』は悲劇的な作品として考えられるだろう。

しかしながら、『傾城恋飛脚』は悲しく辛い感情のみを観客から引き出すわけではない。例えば、忠兵衛と忠三郎の妻のやりとりの場面で、観客から笑いが起こっていた。親しくしていた忠三郎の家を訪ねた忠兵衛と梅川を、不在の夫に代わって忠三郎の妻が出迎える。忠三郎の妻は二人の訪問者に向かい、いま村で起こっている騒ぎについて話す。養子に出された孫右衛門の息子が、遊女のために横領を行い、逃げているという噂である。その中で、彼女はさんざんに孫右衛門の息子をこき下ろす。もちろん、忠三郎の妻の話に登場する孫右衛門の息子とは忠兵衛のことである。自身の醜聞が故郷

中に知れ渡っていることを知った忠兵衛にとっては、父のさらされた立場も含め、彼女の言葉が針のように感じられたに違いない。ところが、観客席からはここで笑いが起こっていた。私も鑑賞中、思わずクスリと笑ってしまった。彼女はわざと忠兵衛を傷つけようとしているわけではないものの、結果的に忠兵衛に忠兵衛の悪口を言ってしまったっている。ただ訪問者への愛嬌で話したおしゃべりが、反対に訪問者を傷つけている。その皮肉的な状況に可笑しさを覚えたからである。

忠兵衛と忠三郎の妻の皮肉的な状況は、彼女が忠兵衛に「気づかない」ことよって生まれている。忠兵衛と対面せずとも、二人を自身の息子と恋人と悟った孫右衛門とは対照的だ。忠兵衛や梅川、孫右衛門は『傾城恋飛脚』の悲劇の中心的位置に置かれた人物である。追手から逃げねばならず、父子の対面は満足に叶わない。あるいは、息子を自ら捕らえるか、顔を見ずに村から追い出さなければならぬ。しかし、そのほかの人々悲劇的な出来事から離れた場所にいる登場人物一にとっては、彼らの出来事はあくまでも他人事であり、見ず知らずの訪問者へ、簡単に話題として提供できるものでしかない。だからこそ、忠三郎の妻は忠兵衛・梅川と対面したとしても、彼らが自身の語る二人組だとは気づかないだろう。

『傾城恋飛脚』は確かに悲劇的な物語である。だが、私たち観客はあくまでも物語を外側から眺めている。物語に対しては一番の他人であると言えよう。したがって、忠兵衛や梅川、孫右衛門たちの状況に同情し、物語のテーマとして義理や人情を語りながら、同時に『傾城恋飛脚』に笑うのである。